

藁細工

草履や敷物など、白川郷の日常生活で使われるものの多くは、稲わら（ワラ）を使って手作りされたものである。その一例が、あしなかと呼ばれるわら草履である。これは文字通り「半分の足」を意味し、一般的に足の半分の長さであり、つま先と足の甲だけを覆い、かかとが露出していることからその名がついた。小型化したことで、稲作の難しかった山間部では貴重な稲わらが節約された。

ワラは縄、敷物、背負子、長靴、脚絆を作るためにも使用された。これらの日用品を作るのは、一般的に男性の仕事と考えられ、屋外であまり仕事をするできない雪の多い冬の時期に行われた。村人 1 人が 1 年間に使うアシナカは 40 足ほどで、1 年分を作るには、冬の夜、焚き火の明かりの下で何時間も労働する必要があった。

野外博物館 合掌造り民家園では、自分だけのあしなか作りを体験することができる。ワークショップは合掌造りの家屋の中で行われ、所要時間は約 2 時間。予約は同館のインフォメーションで受け付けている。ワークショップでは、記念品として飾れる飾り輪のついた、1 つのあしなかを作ることができる。